

氏名 松島剛史
学位の種類 博士(社会学)
学位授与年月日 2011年3月31日
学位論文の題名 グローバル化過程におけるラグビー空間の構成に関する研究
—20世紀後半の国際ラグビー連盟による統治体制の形成に着目して—

【論文内容の要旨】

1. 研究目的と方法

本論文は、スポーツのグローバル化過程におけるその変容について、20世紀後半のラグビーを対象に、とりわけ、1970年代後半から商業化と不可分なラグビーの普及と発展に関する世界戦略を始動させた国際ラグビー連盟の活動に着目し、その文脈にひきつけてワールドカップやラグビー憲章といった施策の機能を捉え直すことで、グローバルな統治体制の形成とその下でのゲーム空間の構成について明らかにすることを目的としている。

その際、グローバル化を「世界規模の社会的な相互依存と交流を創出、増殖、拡大、強化すると同時に、ローカルな出来事と遠隔地の出来事との連関が深まっているという人々の認識の高まりを促進する、一連の多次元的な社会過程」として捉え、スポーツのグローバル化研究を、スポーツという文化を手がかりにして、この社会過程を読み解く、あるいは逆にグローバル化という概念を導入してスポーツの世界的な展開過程を読み直す試みとして把握している。

ラグビーは、いまや100を超える地域や国々でおこなわれており、また1987年からはじまるワールドカップは、しばしばサッカーのワールドカップとオリンピックに次ぐ国際競技会と称されるほどに、一大文化産業としてその地位を築き、衛星通信技術や市場を介して世界の人々の生活に浸透している。

もっとも、国際ラグビー連盟は、もとよりグローバルな規模でラグビーを統治する機関であったわけではなく、また創設時から分岐を抱えつつ統合へ向かう志向を内在していた。したがって、ラグビーとは、不変的なグローバル文化として誕生し、一方的に浸透してきたわけではなく、それを取り巻く仕組みとダイナミズムの所産として、絶えずそのありようを変えながら展開されてきたのである。

とりわけ、本論文では国際ラグビー連盟に焦点付け、自らの世界戦略と結びつけたワールドカップを梃子にした統治機構の再編成という観点から捉えるとともに、ルール適用と解釈の準拠枠として展開されたラグビー憲章および関連施策が、グローバルな規模でのゲームの均質化を図り、営利組織の介入をとまなう商業化と不可分なゲーム局面にみられるジレンマを探りながらも、管理し統制しえる仕組みと過程を検証する。

2. 本論文の構成

序章

1. 本稿の目的

2. 先行研究の検討

2-1. ラグビーのグローバル化を捉える認識枠組みと視点

2-2. 国際ラグビー連盟の性格と機能をめぐって

2-3. 現代ラグビーのグローバル化の動因とワールドカップの機能

2-4. メディア・コングロマリットとラグビーの関係：ゲーム変容をめぐって

3. 研究方法

3-1. 資料

3-2. 対象および時期の設定

3-3. 用語の定義、資料の表記方法

第1章 国際ラグビー連盟の創設とゲームの拡散—1970年代における国際ラグビー連盟の位相—

1. ラグビーの生成と展開

1-1. ラグビーの「誕生」

1-2. ラグビーの世界的分布：統括機構の成立を指標にして

1-3. 差異化するラグビー：ゲームの密集状況をめぐって

2. 国際ラグビー連盟の創設と特徴

2-1. 国際ラグビー連盟の創設：越境する問題への対応

2-2. 統治機関の特徴と機能

2-3. 国際ラグビー連盟の構成と議席の変遷：意思決定への影響力をめぐって

第2章 国際ラグビー連盟の世界戦略と権力関係—1987-1995年ラグビーワールドカップの機能に着目して—

1. 商業化と不可分な世界戦略の始動

1-1. スポンサーシップとラグビーの促進、普及の関係

1-2. 国際ラグビー連盟の世界戦略の始動と反応

2. ワールドカップの開催をめぐる諸相：国際ラグビー連盟の統制力をめぐって

2-1. ワールドカップという商品の開発

2-2. ラグビーの精神や固有性の促進、発展とワールドカップ事業

2-3. ラグビー分裂の危機と統制力の強化

3. グローバルな統括機構の形成：包摂と排除の構造

3-1. 非会員ユニオンの包摂と「正しいラグビー」の象徴

3-2. カウンシルと企業体の形成

第3章 ラグビーの均質化とゲーム特性をめぐるジレンマ—パーフェクトラグビープロダクトのルール実践の是正をめぐって—

1. ラグビーの均質化をめぐる戦略

1-1. グローバルな統治機構の成立と非対称的關係

1-2. 国際的な管理統制者によるゲームの統制

2. 国際ラグビー連盟を取り巻く状況

2-1. 観客・視聴者への眼差し

2-2. ライバルとしてのリーグラグビーへの眼差し

2-3. スーパー12批判とその基準の「共有」

3. ゲームの均質化と国際ラグビー連盟の権限強化

3-1. ラグビー憲章とレフリング施策

3-2. 異端なスキルの排除とパーフェクトラグビープロダクトの制御

終章

1. 各章のまとめ
2. 今後の課題
3. まとめに代えて

3. 本論文の要旨

第1章では、現代の事象をより鮮明にする意図で、ラグビーの生成と展開を概観しながら、1970年代における国際ラグビー連盟の位相について検討している。

第1に、19世紀半ばのイングランドにその原型を求めうるラグビーは、ユニオンや連合といった統括機構の創設をともないながら、イギリス帝国植民地をはじめ世界の国や地域に広がった。その際には、国際ラグビー連盟以外にも、フランスフェデレーションを中心にヨーロッパのユニオンから構成される国際アマチュアラグビー連合や、アジアラグビーユニオンといった「国際機構」も存在し、ネットワークを形成していた。他方で、ラグビーは、プロを主力とするリーグラグビーという類似ゲームとの分裂を経験した。リーグラグビーはラグビーからラックやモールなどを取り除くことで自己定立した。この点から、ゲーム上、ボールを中心に起こる密集状態が、リーグラグビーとラグビーの分水嶺のひとつであり、同時に観客にとっての「面白さ」を鑑みた場合に争点となっていたことを明らかにした。

第2に、1970年代までの国際ラグビー連盟とは、ホームユニオンおよび旧植民地ユニオンを統括する機構であった。もとよりそれは、会議における議論と投票を通じた意思決定という民主的手続きの下で、とりわけ規約やルール、アマチュア規定といった諸規則を立法し、またそれに関する論争を調停、解決するという司法的作用を発揮して、ラグビー・ゲームのありようを統治する機関であった。逆にいえば、国際ラグビー連盟は会員ユニオンが自らの意向を総意に反映させるべく意見を闘わせる舞台であるが、そこで決議された内容は、その意思決定手続きに直に関わる会員ユニオンの構成と、会議における影響力の指標たる議席数によって左右されてきた。

とはいえ、会議における会員ユニオンの対等性という理念の下で、国際ラグビー連盟がラグビーのあり方を問い直し再構成する機能を果たしえたことは、ラグビーの「適切さ」や「正しさ」を検証し、その所産を会員ユニオンに共有させることを通じてラグビー秩序を形成していくエージェントとして捉える契機となった。

第2章では、国際ラグビー連盟が、自らの外部で、「国際機構」を創設しながら活動していた非会員ユニオンを、ワールドカップという装置を介して包摂し、グローバルな統治機関に向けて躍進した過程を明らかにしている。

第1に、国際ラグビー連盟は、1970年代に入って、ラグビーの普及と促進という理念の下で、営利組織や国家などから財政的援助を受けることを会員ユニオンに許可し、また自らの世界的な普及と発展に関する戦略計画を始動させた。この点は、ラグビーのグローバル化が商業化と不可分な関係で進みはじめたことを意味し、国際ラグビー連盟と非会員ユニオンの距離を縮めつつも、フランスフェデレーションの反発、もしくは国際アマチュアラグビー連合との緊張関係を顕在化させた。

第2に、多国籍企業やメディア企業と結びつきながら国際ラグビー連盟は、とくにアマチュアステータスに関わって培われてきたとされるラグビーの精神や伝統を促進し、発展させる財源を捻出する手段とし

てワールドカップを開発した。それは国際ラグビー連盟にとって、会員ユニオンの財政を潤わせ、アマチュアステータスの崩壊と深く関わるラグビーの損傷や分裂を防ぐことを通じて、自らとゲームの信頼を回復し、管理の正当化をはかる財務政策でもあった。従って、ワールドカップの収益を増やし、またラグビーの商品価値を高めることは、国際ラグビー連盟にとって重要な課題になった。他方で、ワールドカップを通じて財務基盤が潤うことは、非会員ユニオン、わけても規模の小さい、もしくはおそらく政治経済的な理由から財務基盤の脆弱なユニオンにとって魅力的な効果として映っていた。

第3に、大会参加資格が会員資格に結びつけられたことは、上記のような要望をもつ非会員ユニオンが、ワールドカップ事業に参加すべく、自ら進んで会員資格を取得し、国際ラグビー連盟の管理を受け入れることにつながり、ワールドカップ事業が、国際ラグビー連盟の世界戦略に節合されたことを意味し、結果として会員数の増加つまり同連盟の管轄範囲の急速な拡大をもたらした。

第4に、会員基準の「ゲームの精神や品行」といった抽象的な文言の解釈が、「制裁権」を後ろ盾にした国際ラグビー連盟に一任されたことは、同連盟が自らを取り巻く状況に応じて、その意味内容を操作的に構成し、非会員ユニオンを柔軟に包摂できたことを意味した。同じ手法から国際ラグビー連盟は、ワールドカップ参加国の選定に際して強調された「非ラグビー特性」という抽象的な文言を用いて、ワールドカップから「ラグビーらしくない」、もしくは「好ましくない」要素を排除した。つまり、ワールドカップとは、収益性の向上に結実するかたちで「正しいラグビー」を象徴する装置でなければならなかったと同時に、統一的管理権を正当化する世界戦略に不可欠な装置としても機能したのである。

第5に、会員数や収益の増大の只中であって、1990年代から国際ラグビー連盟は構造改革をおこない、旧来の会員ユニオンの意向が強く反映するカウンシルという議決機関とワールドカップ関連企業を新設した。その際、大多数の新規会員ユニオンは、往々にして自らの多様な要求や意向がカウンシルの取捨選択もしくは抽象化によって「総意」に反映されざるをえない立場に置かれた。そして、この国際ラグビー連盟が、1995年に国際競技連盟としてグローバルな統括権を獲得（統一的な国際競技連盟として国際オリンピック委員会に認定されるもしくは国際競技連盟連合に認定される）し、同時にオープンプロ化を宣言したことは、以後それが商業化と不可分なラグビーのグローバル化過程を統治する地位についたことを意味した。

が、同時に、その過程はメディア・コングロマリットがグローバルなメディア市場で流通させるテレビコンテンツの豊富化をはかって、独占放映権のみならず、ゲームシーズン制や計画の変更、場合によってゲームのあり方にも介入し、スポーツ組織の統括権を揺さぶるほどの事態を生じさせていた。

第3章では、カウンシルを機軸にした国際ラグビー連盟が、ラグビー憲章を介してゲームの均質化とその安定的な管理体制を敷きながら、ゲーム空間の自律的な構成をはかることを明らかにした。

第1に、1990年代半ば、ラグビーの分裂を危惧する国際ラグビー連盟は、カウンシルを中心に国際的なラグビーの管理統制者としての地位を強固にし、同時に属性や関り方などによって多様なゲームを均質化することで、営利企業の介入を阻みながら商業化と不可分なラグビーのグローバル化を統制することを目指した。

第2に、改めて「ラグビーとは何か」が問い直された第1回ゲーム協議会では、少なくともニュース社の介入を受けて、世界的なメディア市場の占有をめぐる争うリーグラグビーというライバルや、多様な観客・視聴者の視点、またパーフェクトラグビープロダクトのひとつ、スーパー12を「ボールの争奪」の

軽視という点で批判する潮流の見解を想定してゲームの改善を図った。

第3に、ラグビー憲章というラグビーの独自性を保証する枠組みは、その標準的なルール実践の指標に照らしてゲームの均質化を促進した。その際、同憲章の抽象的性格によって、カウンシルは、国際ラグビー連盟を取り巻く状況に応じて、ルール実践の正当と異端の「境界線」を柔軟に変動することができるとともに、ラグビーの独自性という漠然とした意味合いの下で、一定の多様なゲームのありようを温存しえたのである。また、公認レフリー制の誕生と拡大は、国際ラグビー連盟の代理執行者として、さまざまな競技会で“正常なゲーム”を産出することを通じてラグビー憲章の機能を補完した。

第4に、第2回ゲーム協議会では、ラグビー憲章に照らして新たなルール実践が推奨される一方で、パーフェクトラグビープロダクトで多用されていたブリッジングスキルが禁じられた。このことは、カウンシルユニオン間の駆け引きの所産であると同時に、国際ラグビー連盟がスーパー12に批判的な潮流の批評を「共有」し、国際的な管理統制者としての地位を強固にしながら、ニュース社によって主導されるパーフェクトラグビープロダクトのゲーム形相を制御したことを意味する。また、タックル後に生じる、双方のプレイヤーが密集して等しくボールを奪い合う局面を軽視したルール実践を、異端として排除したことは、リーグラグビーとの差異化を際立たせながら、当時のラグビー・ゲームの独自性を限界づけ、その正当性とともにゲームの均質化を世界的に推し進めたことを意味した。そこには、密集状態におけるボールの争奪というゲーム局面を、ラグビーの「伝統」や理想的な過去として再評価するノスタルジックな潮流が介在していた。

このように国際ラグビー連盟は、ゲーム空間の安定的な管理統制システムを駆使して、カウンシルと非カウンシル会員の力関係を温存したまま、会員ユニオンの多様なルール実践を抑圧し、ゲームの均質化を進めた。しかし一方で、営利企業の介入も起こりうる商業化と不可分なラグビーのグローバル化という動向の下で、改めて「ラグビーとはなにか」を問い、ラグビーにおける「伝統」を再評価する動きと共鳴しながら、ゲーム空間を自律的に構成しようとしたのである。

4. 本論文の研究上の特徴

1990年代以降、スポーツのグローバル化に関する研究は、さまざまな方法論によって国際的に議論されてきているが、スポーツ文化の外延的な変化の指摘にとどまる傾向や地政学的な図式主義に陥っている嫌いがある。またスポーツの「グローバル化」の第5段階にあって、「イングランドの貴族の差異抽象であったフェアプレイやアマチュア・エートスが衰退」ないしは「より抽象化された世界普遍に向かって、イングランド発の貴族的エートスを反映した、若しくは残存していた固有性が払拭されていく過程」と仮説されていたのに対して、本論文の特徴はもっともイングランド色が濃厚であると言われ、かつ「アマチュア」に固執してきたラグビーが、ワールドカップの創設を契機に国際機構化を果たし、かつ「ラグビーとは何か」を常に問いながら、「ラグビー憲章」を制定する過程のなかにおいて、遵守すべきゲームの内包性を明らかにし、もってラグビーの正当性を「ワールドカップ」の「商品性」として強化したことを明らかにしたことにある。

国際ラグビー連盟は、他の国際競技連盟のように、国際的な単一統括機構ではなく、長く、イギリス連邦諸国やアイルランドを統括するユニオンであり、国際アマチュア・ラグビー連合等が並立していたのであり、国際オリンピック委員会と協力する統括機構と認定されたのは、1995年のことである。

つまり、国際スポーツ機構の管理・統括権の強化過程を、単に組織・機構論で跡付けるだけではなく、

「憲章」に表れた規範として、さらにそれを具象化するルール実践として、ラグビーの基本精神やゲーム内容をも関連つけて、統一的に解明したことにある。

【論文審査の結果の要旨】

主査・副査および研究科教学委員出席の下で行われた公聴会では、主査・副査から以下のような基本的評価ならびに意見が出された。

第1に、本論文は大変優れており、それはスポーツのグローバル化に関する理論枠がしっかりしていることに起因しているとの評価を得た。

それは、スポーツのグローバル化論を先便づけたマグウィア「スポーツ・メディア・コンプレックス」支配説やこれ批判的に検討した山下説によって構築された理論フレームを踏まえて、ダニング・シャドの総論的研究やハッチンスの「メディア資本との攻防とその影響」研究、さらにはリチャードソン・ライアンの「生活世界からの抵抗運動研究」といったラグビー研究を総括したことに起因している。

とくに、ラグビーのグローバル化を捉えるにあたって、先駆的な認識枠組みを提示した。単にゲーム様相の変化のみならず、「国際機構」の管理・統括権の強化過程として描き出す視点と方法論の先駆性、ならびに精緻な実証は高く評価されてよい。

第2に、このことと関わって、「ボールの奪い合い」と「プレイの継続」を重視するラグビー・ゲームを「憲章」に織り込むことによって、共通の「ラグビー」像を再確認する過程が、同時に「国際機構化」過程であったことを実証的に明らかにした点は、きわめて重要である。このことによって、ラグビーが特殊リージョナルなエトスにとどまるという理解ではなく、グローバルな展開の中にあってもなお、企業の介入や商業主義的偏向を克服するエネルギーと展望をもつことを示唆していると言えよう。

もとより、ラグビーユニオンの“支配力における優位性”がなくなったわけではないが、「国際機構化」過程は、同時に“組織の民主化過程”であり、その公平性・公開性が今後とも一段と重要であることを説得力を持って明らかにしえたことも、本論文の大きな成果である。

第3に、国際ラグビー連盟の議事録と言う第一次資料によって、「ユニオン」内部の推進と抵抗の様相を実証したことは、国際学術的にも評価されてよい。

ともすれば、「ゲーム」の表層批判になりがちなジャーナリストイックな批評ではなく、メディア資本である「ニュース社」の浸透・介入を支持する側と制御（抵抗）する側の論点を描き出し、その実態を議事録によって確証的に明らかにしたのである。

第4に、ラグビー・ゲームの内実を迫る方法論として、ルール実践に着目して、ラグビー憲章のめざすゲーム像と規範の再構築として着目し、それとの関わりで、「パーフェクトラグビープロダクト」において多用されていた「ブリッジングスキル」の禁止として収斂させた意味を明らかにしたことは特質に値する。

それは、フットボールから分化した「ラグビー」がその初期の段階で経験した分裂、リーグラグビーとの差別化と組織的分化の中で、遵守してきたゲーム像を再確認し、かつそれを制御してきたラグビー規範ともいうべきものである。そして、それは、今後のラグビー、たとえば2016年のリオデジャネイロオリンピック大会から正式種目として採用される「7人制ラグビー」を普及型にとどめるのか、あるいはサッカーに対するフットサルのように自立的なゲームとするかという近未来を予測する上でも不可欠な指標である。

第五に、論者自身が述べるように、ともすれば、密室化してきた（あるいは等閑視してきた）国際ラグビー連盟（および国際競技連盟）の議論内容に即して、問題の焦点化を測ったことは、ラグビーとそれを支える機構や仕組みが信頼に足るものであるのか、あるいはラグビーという文化的、社会的な運動が正当かどうかを審問する研究として、先駆的位置づけを与えられよう。

【本論文の課題】

スポーツはそれぞれのゲームや身体活動の総称であって、個別的なゲーム様相にふさわしい外延的な装飾や組織・機構を持っており、その個別性を通じて普遍性が達成される。その意味で、本論文は、組織・機構とゲームの外延的・内包的な関連を統合する方法論を提示しており、先駆的な業績と位置づけてよい。それゆえに、ラグビー研究にとどまらない、スポーツのグローバリゼーション研究に一般化しうる理論枠の提示という期待をこめて、いくつかの課題を指摘しておきたい。

第1に、ラグビーにとどまらずに、本論文の理論枠を他のスポーツ研究にも援用できる一般的なフレームに仕立て上げる意味で、国際的な議論の俎上に載せることである。国際学術誌への投稿が期待される。

第2に、その際、より精緻に実証していくためには、要約的な会議事録にとどまらず、これを補強する一次資料の発掘やオーラルなインタビュー等がますます必要になってこよう。そして、ゲーム批評についても、それぞれの国柄や階層をふまえて、豊富化する必要があるだろう。

第3に、論者自身が課題として自覚しているが、メディア・コンプレックスとの攻防を実証するためにも、「ニュース社」の動機と意図に即して明らかにすることが重要であり、その解明方法にも文献資料に限定されない工夫が必要になろう。

第4に、「ルーリング」に関していえば、ワールドカップの創設と発展によって、何を遵守し、何を捨象してきたかをさらに詳細に整理する必要があるだろう。それが、近未来のゲームのあり方を、観衆を含めて公開のもとに探る基本材料ともなる。

第5に、ラグビーはこれまでの「白人・男性的文化」という歴史的偏在性を十二分に払拭しえていないと論者自身が自覚した上で、ラグビーに限らず、グローバル化の志向や「公共性」の所在が改めて、議論の俎上に上ると提起している。それだけに、現実社会にあってその動態のなかから、まだ見ぬ「スポーツ文化」とそれを支える仕組みが形成されることへの絶えざる希求を持続する上でも、個々のゲームが持つ「ローカルな特性」、「普遍性」、「共通性」を再整理して、ラグビーにとどまらない対象の拡大を通じて、スポーツと社会の動態に迫ることであろう。

以上、公聴会と論文審査の議論により、審査委員会は本論文が博士学位を授与するに相応しい水準に達していると判断した。

【試験または学力確認の結果の要旨】

本論文の公聴会は、2011年6月17日（金）午後3時から午後5時まで産業社会学部大会議室で行われた。審査委員会は、公聴会の質疑応答を踏まえ、各委員の意見交換の結果、松島剛史氏の博士の学位請求論文について、本学学位規程第18条第1項に基づき「博士（社会学 立命館大学）」の学位を授与するに値するものであると全員一致で判断した。なお、松島剛史氏は、学術論文3本（すべて査読有）および資料紹介1本を投稿発表、また研究会での口頭発表を成し遂げており、審査委員会はこの点からも松島剛史氏が十分な専門知識と豊かな学識を有すること、また、外国語文献の読解においても優れていることを確認した。

審査委員

- （主査）草深 直臣 立命館大学産業社会学部特別任用教授
（副査）山下 高行 立命館大学産業社会学部教授
（副査）有賀 郁敏 立命館大学産業社会学部教授
（副査）佐々木 康 名古屋大学教育学部教授